

現代青年の友人関係に関する試論

傷つけ合うことを避ける傾向について

岡田 努

(金沢大学)

キーワード：現代青年，友人関係，傷つけ回避

現代の青年の対人関係の特徴として、自分が傷つけられないよう、また相手を傷つけないようにコミュニケーションに気を使う傾向が指摘されている。

土井(2004)は、現代の青年は、対立の顕在化を怖れるために、親密な関係であるほど、自分の本当の姿を示さず、相手を傷つけないように細かい配慮を強迫的に行うとしている。そして、相手の感情を敏感に察知しながら、関係をスムーズに維持することにエネルギーを使い果たしてしまっている。このように対立の回避を最優先にして衝突を避けるような対人関係の在り方を、土井(2008)は「優しい関係」と称している。浅野(2006)は、現代の青年の友人関係は、従来のような学校や地域社会に加えアルバイト、インターネット、携帯サイト等様々なチャンネルを持ち、それぞれの場にふさわしい態度を敏感に読み取る繊細な感受性を育てているとしている。岩田(2006)も、現代の若者においては、友人関係やこれと対応する自己意識が、場面ごとに使い分けられるようになり、それぞれの文脈で友人関係を上手くこなしていくために、それらの場面・文脈を適切に読み取る高度で繊細なコミュニケーションのスキルが要求されるとしている。また斎藤(2006)も、現代青年の対人評価は、勉強やスポーツの能力よりも、多く笑いが取れるといったコミュニケーションに関するスキルが重視されることを指摘している。土井(2008)はまた、現代青年は、自己肯定感が低く、身近な他者から常に承認を受け続けないと、自分自身を安定させることができないとしている。そのため、コミュニケーションのスキルを駆使し、少しでも相手の欲求や場の空気に注意を払い、相手から拒否されないように努力するとしている。

これらの社会学的な指摘に対して、岡田(2007)は、大

学生に対する調査研究の結果、自他を傷つけることを回避し円滑な関係を指向する青年群では、他者からの評価に対する過敏性が高いことを見出した。またこの群は中程度の自尊感情をもつことから、現代的な友人関係をとる青年は、自他を傷つけないよう警戒することで、他者から肯定的評価を受ける関係を維持し、それによって自尊感情の低下を防いでいる可能性が示唆された。しかし、ここで用いられた友人関係に関する尺度は、「傷つけ合うことを避ける傾向」に特化したものではないため、関連する項目が少なく、新たな尺度作成が必要とされていた。

本研究は、そうした尺度作成の前段階として、青年の傷つけ合うことを避ける傾向に関する実態を探索的に調査することを目的として、自由記述による質的な分析により予備的・探索的な考察を行うものである。

方法

親しい同年代の仲の良い友人との間で、お互い心理的に傷つけ合わないようにするため、どのような点に気を使っているかについて、短い文章での記述を求めた。

回答者

4年制大学学部1～4年生 有効回答 122名

実施時期 2008年6月～8月

いずれも授業時間内に実施した。

分析

ジャストシステム TRUSTIA/R.2 Mining Assistant によって記述の分析をおこなった。これは、得られた回答を文章ごとに区切り、自由記述によるテキストデータを用語辞書によって要素(単語、品詞、出現頻度)を抽出し、文章や語句の関係性を分析するデータマイニングソフトウェアである(大野,石沢,横田,2007)。

なお本研究では、分析の歪みを防止するため、一部の同

義語については同一の言葉とみなした（「友人」と「友だち」など）。

結果と考察

類似した内容の語句を関連づけてグループ化する主題分類を行いデンドログラムによって表示した（Figure 1）。

（なお図中の分類名は、各カテゴリに代表的とみなされた語を表示したものである）

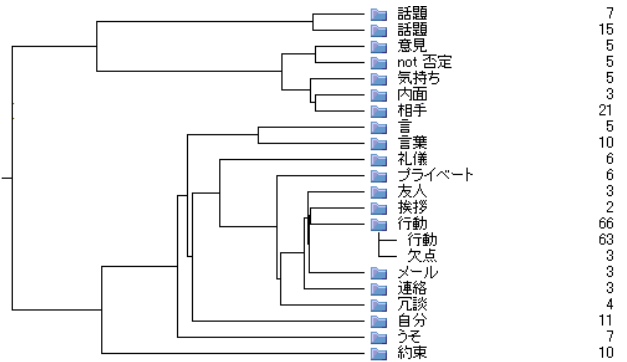


Figure1 主題分類の結果

ここに見られるように、分類名「話題」から「相手」までと、「言」から「約束」までの大きく2つのカテゴリに分類されることが見出された。前者のカテゴリは、相手の話を遮らないように聞くこと、相手の意見や価値観を否定しないようにすること、内面的な話題に気を使い、相手の気持ちを察するよう、立ち入りすぎないようにするといった内容によるまとまりを形成しており、他者と心理的距離を置き相手に同調する傾向が見出された。

（他方のカテゴリは、約束や礼儀を守る、嘘をつかないといった一般的な対人スキルに加え、分類不能な語を含め雑多な対人態度が集まったものと考えられる）。このように、雑多な対人態度の中から、他者と距離を置きながら同調する傾向が際だって認識されている可能性が示唆された。

次に名詞句（対象）がどのような動詞句とつながりをもつかを「現象分析」により抽出した（なお本分析では学年が不明の回答者および大学院生を除いて分析した）。2件以上の文章が見出されたものについて見ると、「相手」という語では、「相手の話を遮らないようにする」「相手が傷つかないように言葉を変えて話す」「相手が自分と異なる価値観を持っていてもそれを否定しない」などが目立ち、また、「友人」（友だち）という語に対しては、「友

だちの短所に触れないようにする」「友人から相談を受けアドバイスする時は肯定してから否定的な意見を述べる」などが結びついており、対人的に距離をおくことで関係を維持しようとする傾向が顕著に見いだされた。これらの名詞句のうち2つ以上の文と対応するものについて、回答者の学年との間でコレスポネンス分析を行った。（学年について無回答および大学院生のケースを分析から除外した）。

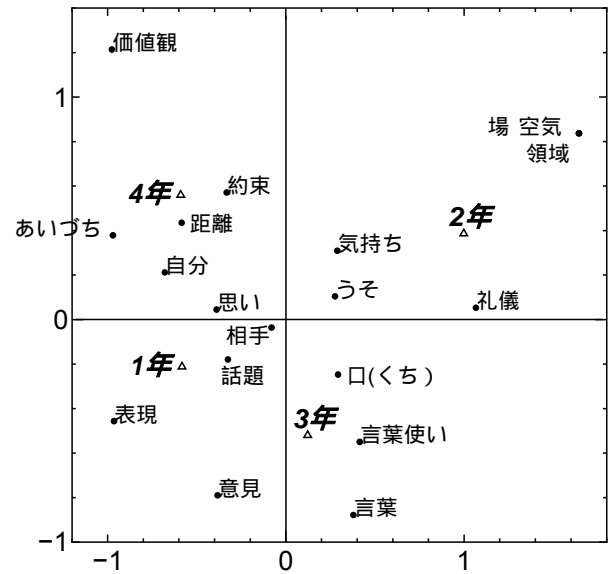


Figure2 コレスポネンス分析の結果

結果の布置を Figure 2 に示す。横軸+方向が「場の空気を読む」など関係から遠ざかる方向、-方向があいづちをうつなど他者を不快にさせないよう気を使いながら関わる傾向、縦軸+方向が「価値観」など行為を通した関わり方、-方向が言語表現を強調した関わり方の軸と考えられた。各学年の布置との関連については次のように考えられる。1年次が「話題を提供する」「相手の話を聞く」「約束を守る」などに近い位置に布置され、相手に気を使いながらも関わりを持とうとする傾向が見られるのに対し、2年次では「踏み入れられたくないような領域には踏み入らないようにする」「場の空気を読んで話し合う」「うそをつかない」など関係そのものから遠ざかる傾向が見られた。3年次では「乱暴な言葉づかいをしない」「相手が気にしていることなどは口にしない」など相手の内面を気遣って自分の言動をコントロールする傾向、4年次では、「興味のない話題でもあいづちをうつ」「相

手と距離をおく」「相手が自分と異なる価値観を持っていてもそれを否定しない」「約束を守る」など、異なる価値観や考え方の相手と一定の距離をもちながら関わる傾向が見られたと言えよう。

すなわち、入学当初は相手と関係を維持しようと指向するが、中盤の学年では相手に踏み込まず関係そのものを回避にする傾向を見せ、やがて適切な距離によって異なる考え方の相手とも関係を維持できるスキルを身につけていく可能性が示唆された。

すなわち、現代の青年の友人との関係は消極的な対人回避の面だけでなく、それを通して、他者との関係のスキルを獲得していくプロセスをも含んでいると考えられる。このことは価値観を共有しない異質な他者とのコミュニケーション、社会的・職業的な人間関係への人間関係の質の転換（下村,2005;2007）などとも符合すると考えられる。

引用文献

- 浅野智彦(2006). 若者の現在 浅野友彦(編) 検証・若者の変貌：失われた10年の後に 勁草書房 pp.233-260
- 土井隆義(2004). 「個性」を煽られる子どもたち：親密圏の変容を考える 岩波書店
- 土井隆義(2008). 友だち地獄：「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房
- 岩田考 2006 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野友彦(編) 検証・若者の変貌：失われた10年の後に 勁草書房 pp.151-189
- 岡田努(2007). 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究,15,135-148.
- 大野邦夫, 石沢朋, 横田久弥(2007). パーソナル・テキストマイニング技術の可能性 画像電子学会 第18回 VMA 研究会
<http://www.hi-ho.ne.jp/y-komachi/committees/vma/contents/vma18/18-1.pdf>
- 斎藤環(2006). 「負けた」教の信者たち：ニート・ひここもり社会論 中央公論新社
- 下村英雄(2005). 就職問題から示される新たな自己モデルへの期待 日本教育心理学会第47回総会自主シンポジウム

下村英雄(2007). 青少年のキャリア意識形成と自己意識の発達促進に関する基礎研究(2) 日本心理学会第71回大会ワークショップ

本研究は科学研究費 基盤(C)課題番号 20530589「現代青年の友人関係・自己のありかたと社会適応に関する研究」の補助を受けて実施された研究の一部である。(おかだ つとむ)